
バカとイメージと先導者

ベガF91

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとイメージと先導者

【Nコード】

N7506Y

【作者名】

ベガF91

【あらすじ】

PSYクオリアの力でアイチが導かれた世界はバカテスの世界であつた。そこで明久と雄二とともに文月学園の学園生活を送ることになる。カードファイト！！ヴァンガードとバカとテストと召喚獣のクロスです。

プロローグ（前書き）

長らくお待たせしました。

予告通りヴァンガードとバカテスのクロスの始まりです。

プロローグ

ヴァンガードファイター、先導アイチはデッキを眺めていた。自分の愛用のロイヤルパラディン。

その時、また幻想を見ることとなる。

「うう……」

目の前にはクレイの世界があった。そして、そこにはアイチの見たこともない世界があった。

（なんだろう……あれ）

その瞬間、光がアイチを包む。

場所は変わって、『文月学園』。保健室のベッドに横たわったアイチは意識を取り戻して目を覚ます。

「こ、ここは……？」

「目覚めたか」

「えっと、あなたは？」

「私は西村宗一。この文月学園の教師だ」

アイチに話しかけているのは文月学園の教師で生活指導の鬼と恐れられ、生徒から鉄人と言われている西村宗一である。

「文月学園……？」

文月学園なんて聞いたことがないアイチは不思議そうな顔をした。そして鉄人に自分の通っている学校を聞いてみることに。

「あの、後江中学校ってご存知ですか？」

「後江中学？ 聞いたことがないな」

「えっ！？」

鉄人の言葉にショックを受けてしまうアイチ。深く考え込んだ結果。

「もしかして、パラレルワールド……？」

以前にもカムイが読んでいた漫画のことを思い出す。それはパラレルワールドが舞台となっている世界だった。

そして、今自分が平行世界、パラレルワールドに来てしまったことを理解した。

「なに？」

鉄人に学園長室に連れてこられ、アイチは文月学園学園長である藤堂カヲルと会う。

「あんたが客人ね。私は藤堂カヲルだ、あんたの名前は？」

「先導アイチです」

「それじゃあ、先導。あんたのことを話してくれるかい？」

「はい」

アイチは自分の世界のことと今大人気のカードゲーム、ヴァンガードのことを話した。今自分が知っているのはこれしかないのである。

「なるほどね。先導、ひとつ提案あるんだが」

「なんですか？」

カヲルの言葉に息をのむアイチ。

「この文月学園に学生として通ってみないか？」

「僕が……ですか？」

カヲルの言葉に少し不安を感じる。

「嫌なのかい？」

「いえ、僕はまだ中学生ですし」

その言葉にカヲルはふっと笑う。

「別に気にすることないよ。あんたは異世界から来た客人だし。それに行くあてはあるのかい？」

「それは……………」

カヲルの言葉に黙ってしまう。確かに、異世界に来てしまった以上、どこに行けばいいのかわからない。

ここはカヲルの言うとおりにするしかなかった。

「それじゃあ、明日文月学園の編入試験を行うよ。今日は文月学園に泊まって勉強をしたらどうだい？」

「じゃあ、お言葉に甘えて……………」

まだ不安気味なアイチ。すると、鉄人はドアの方へと向かっていった。

「そんなところで何をしている！」

「うわ！」

「ぐお！」

バタッ

鉄人はドアを勢い良く開けて、そこから茶髪に少し女性に見える顔立ちをした少年吉井明久と赤髪に背が高く逞しい体を持つ少年坂本雄二が倒れこんだ。

それを見たアイチもびっくりする。

「な、なに……?」

「この学園のバカどもだよ」

「貴様ら、どこまで聞いていた」

「えっと……」

「全部だ」

鉄人に星座をさせられ、すんなり答える雄二。

「まったくお前らは……」

「あの、これは僕の問題ですし、この2人を責めないでください!」

アイチは2人をフォローした。

「……わかった、もう立っていい」

鉄人の許可を得て、明久と雄二は立ち上がる。

「ありがとう! えっと……先導君だっけ?」

「アイチでいいよ。それと君たちの名前は……」

「僕は吉井明久。よろしくね、アイチ」

「俺は坂本雄二だ。よろしくな、アイチ」

「こちらこそ、明久君、雄二君」

3人は握手を交わす。すると、アイチは鉄人にこんなことを聞いた。

「西村先生、この2人のクラスはどこなんですか？」

「なぜそんなことを聞くんだ？」

「その……、この2人と同じクラスがいいなと思っただけです」

「「え!?!」」

その言葉に鉄人はアイチに聞く。

「どうしてだ？」

「彼らに僕の秘密を知られてしまいましたし、同じクラスの方がいいと思った上です」

「そうか。しかし、こいつらのクラスはFクラスだぞ」

アイチはそのFクラスのことを鉄人に聞いてみた。

「Fクラスってどんなクラスなんですか？」

「この文月学園は一年生の最後に振り分け試験と言うものを行い、成績別にクラスを振り分けるんだ。成績が優秀な生徒はAクラス。そして、学園最低のバカの生徒達の集まりがFクラスだ。本当にFクラスでいいのか？」

それでもアイチの考えは変わらなかった。

「大丈夫です」

「わかった。吉井！ 坂本！」

「「は、はい!？」」

「先導の面倒はお前達が責任を持って見ろ、いいな!？」

「「イエッサー、鉄人!」」

「それと何度も言うが、西村だ!」

明久と雄二が鉄人に敬礼する姿を見たアイチは少し不安そうな目で見ていた。

（大丈夫かな、僕……）

召喚獣と先導者（前書き）

設定は後日書く予定です。

チームQ4や森川たちもちろん出します。

アイチの成績は漫画版を基準としています。

召喚獣と先導者

鉄人とカヲルと一旦分かれ、アイチは明久と雄二にヴァンガードのカードを見せていた。

「これがヴァンガードかあ」

「しかし、見たこともないカードばかりだな」

明久と雄二にとってはヴァンガードを見るのは初めてであった。その後もアイチは自分の愛用デッキのロイヤルパレードの他にもかげろう、オラクルシンクタンク、ノヴァグレップなど教えた。

「この世界にはヴァンガードはないの？」

「ああ。それよりアイチ、得意教科はなにかないか？」

「得意教科は……特にないけれども苦手な教科はないかな？」

「なるほどな……。でも、点数によっては『試験召喚戦争』で活躍はしそうだな」

雄二からでてきた『試験召喚戦争』という言葉聞いてアイチははてなを浮かべる。

「ねえ、『試験召喚戦争』ってなに？」

「そっか、アイチは知らないんだっけ？」

「説明してもまだ半分はわからないだろ。明日の編入テストが終われば鉄人に教えてくれるだろうから」

「その、鉄人って西村先生のこと？」

ここでアイチは雄二にどうして鉄人こと、西村のことを鉄人と呼ぶのか聞いてみる。

「そのうちアイチにもわかるさ、それより明日の編入テストは大丈夫か？」

「あ、そうだった」

「わりいな、邪魔しちゃって」

「ううん。大丈夫だよ」

「そんじゃあ明久、そろそろ帰ろうぜ。アイチ、また明日来るからよ」

「アイチ、また明日」

「うん。明久君も雄二君もありがとう」

アイチは明久と雄二に別れの挨拶をすると、鉄人の用意した部屋で勉強をすることにした。

そして用意された参考書を見てみると高校の範囲。さすがのアイチも頭を掲げてしまう。

「日本史と世界史に分けられるんだ。そしてそのほかの教科もまだ習っていないものばかり」

まだ中学3年生のアイチにとっては最大の山場であった。一から習っていないものをやるのは無理があるがそれでもアイチは筆記用具の中からペンを取り出し、参考書を見はじめる。

「でも、今はやるしかないんだ」

翌日のお昼過ぎ、明久と雄二はアイチの様子を見に来た。

「どうだった？」

「ちょっと難しかったけれどなんとか……」

「そうか」

「そろそろ採点も終わっている頃だから行かなきゃ」

そういつて3人は学園長室へと向かった。

学園長室に入ると、カヲルと鉄人が居た。

「あの……」

「先導、これがあんたの成績だよ」

カヲルは成績表をアイチに渡す。明久と雄二も隣で見る。

現代国語：C

古典：C

数学：D

物理：D

化学：C

日本史：A

世界史：A

現代社会：B

英語：C

保健体育：D

「すごいよ！ 平均してもCクラス並みだよ！」

「日本史と世界史が強いな。これは試験召喚獣戦争でも活躍しそうだな」

ここで鉄人が三人に話しかける。

「吉井、坂本。これから先導の試験召喚獣の手伝いをしてもらおうぞ」

「はい！」

「了解！」

「先導、これからこの文月学園の試験召喚システムを見てもらう」

「お願いします！」

明久と雄二が対峙し、西村が腕を上げて言う。

「数学、承認！」

西村を中心に特殊なフィールドが展開される。明久と雄二はポーズを決めて言い放つ。

「試験召喚獣……試験^{サモン}召喚！！」

明久と雄二の前に、召喚者をデフォルトされた80センチの召喚獣が現れた。明久の召喚獣は改造学ランに木刀を装備しており、雄二は改造制服にメリケンサックを装備している。

「これが召喚獣……」

カヲルがニヤリと笑いながら言う。

「そうさ。これが私が開発した化学とオカルトと偶然で完成した『試験召喚システム』さ。試験の点数によって召喚獣の強さが直結するんだよ」

「あの、僕もやってみてもいいですか？」

「ああ、もちろん」

アイチは右手を前に突きだして言う。

「試験召喚獣……試験^{サモン}召喚！！」

起動キーの詠唱でアイチの召喚獣が現れた。けれども、その召喚獣は召喚者であるアイチをデフォルトした姿ではなかった。

「ば、ばーくがる……？」

それはヴァンガードでいつもアイチが^{ファーストヴァンガード}FVとして使われているばーくがるであった。

そして大きさは明久と雄二の召喚獣と同じ80センチで、デフォルトの姿になっている。

「なんでばーくがるが……ってこれは……」

目の前には紋章の上に置かれているばーくがるのカードが一枚あった。しかもその紋章はヴァンガードサークルの紋章であった。

「もしかして……！」

アイチはすぐさまデッキを取りだしシャッフルをして上から5枚引く。その後、山札からカードを一枚ドロ―し、手札から1枚のカードをば―くがるのカードの上に置く。

「小さな賢者マロンにライド！」

すると、アイチの召喚獣の姿が変わり、マロンの姿となった。それを見た明久と雄二は驚く。

「す、姿が変わった!？」

「これって昨日言ってたヴァンガード……!？」

「ソウルのば―くがるはリアガードサークルに移動」

カードをリアガードサークルに移動させると、アイチの召喚獣であるマロンの後ろにば―くがるが出てきた。

さすがのカヲルも驚いてしまう。

「召喚獣が変形したうえ召喚獣が増えた？ そんな機能を付けた覚えはないよ!？ それに何故召喚獣の姿が召喚者とは違うんだい!？ 先導、あんた何者だい？」

「えっと……」

試験召喚システムが今までに無いイレギュラーな事態が発生したことにより、カヲルはアイチの存在に疑問を持つ。

さすがにアイチも困った表情を浮かべる。すると鉄人が救済に入

った。

「学園長。先導は今日の編入試験で疲れています。試験召喚システムの事はまた後日にでも」

「……わかったよ。ほら、さっさと出て行きな」

「あんまりアイチを困らせないでよ、ババア」

「それでも教育者かよ、ババア」

「明久君、雄二君……学園長にむかって失礼だよ」

明久と雄二はカヲルに暴言を言い残すと、アイチは注意した。明久と雄二にアイチを連れてさっさと学園長室から出て行く。

その後、明久と雄二はアイチに文月学園を案内していく。そして、誰もいない屋上に着いた。

「そつえば、新学期っていつからなの？」

「来週の4月7日からだよ」

「アイチ、もしかして楽しみなのか？」

「まだ不安なところもあるけれど、どんな生活になるのか楽しみだよ」

アイチはそう答え、明久と雄二の会話が続いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7506y/>

バカとイメージと先導者

2011年11月24日19時56分発行